

本能学区のまちづくりとその担い手

本能まちづくり委員会委員長
西嶋 直和

西嶋直和（にしじま なおかず）

1947年生まれ。1966年京都市立洛陽工業高等学校色染科卒。同年より家業染色補正業を修行を経て営む。1988年京都市立本能小学校PTA会長。1991年京都染織青年団体協議会会長。1999年より本能まちづくり委員会委員長、現在に至る。

第Ⅰ部 講演

本能まちづくり委員会—学区の統合から

土山 今日は、「地域公共人材論研究」という地域公共人材を具体化する議論と実際にかかわっている方のお話を構成しながら理論的な構築を進めていく科目（担当：土山）と、「先進的地域研究」という地域の先進事例やリーダーシップにかかわる事例を聴きながら地域政策に関する知見を深めるという科目（担当：大矢野）、この二つの科目の合同で「本能まちづくり委員会」の西嶋さんにお出でいただきました。西嶋さんを囲んでのクロストークを進めたいと思います。西嶋さんは、もともとはPTAの活動から地域の活動にかかわられていまして、本能まちづくり委員会では多彩な活躍をされています。地域の形、まちづくりの形について、伝統産業をキーワードにしつつ、しかも再発見しながら新しいまちづくりを進めてこられた方です。自己紹介の後、西嶋さんからの講演、その後、論点提起をした後に、皆さんとのクロストークへと進めていきたいと思います。

西嶋 西嶋直和と申します。私は昭和22（1947）年生まれで61歳です。本能まちづくり委員会は、元学区の小学校の地域で、自治連合会の直属の委員会でもまちづくり委員会を設立して、委員長をさせていただいています。私は本能小学校の出身ではありませんで、中学3年の時、引っ越してきました。親父は大正時代に本能尋常高等小学校を卒業しております。家業は染色補正業、着物の工程の中で失敗されたところを補正するという仕事です。最終的に問屋さんへ行く前にうちに回ってきて、不備なところを直して納めるという仕事をしています。

今は京都の中でも着物業界、西陣も含めてですが、衰退の一途をたどっておりまして、皆、苦しい中で頑張っております。ただその中では、うちの業種は着物を着用された後のメンテナンスも担当していますので、着物を着てくださる方々が最近が増えてきたこともありまして、古い着物を着たいなと出してこられたら、古いシミがあるから何とかなら

んか、色を変えられないかということで相談に来られる例も多くなってきました。そういうことが今後の和装振興にもつながっていくと思って、地域の中でも我々のやっている取り組みが少しでも役立っているのではないかと考えております。

本能学区のまちづくりの取り組みということで委員会の説明と、「本能学区まちづくりのしおり」について説明させていただきたいと思います。本能学区は四条通りと堀川、三条、西洞院に囲まれた小さな地域の中の小学校区でした。昔、信長が明智光秀に本能寺で討たれたのが6月2日。その本能寺のあった土地でもあります。本能学区が明治に入って番組小学校下京第2番ということで小学校が地域の方々によってできたんですが、平成6(1994)年に統合しました。その時には我々の地域では「なぜ今まで地域でつくってきた小学校を統合しないといかんのや」とケンケンガクガクしたわけです。私はちょうど、昭和63(1988)年にPTA会長をさせていただいていましたが、その時の入学児童の数が9名でした。それまでは二桁でしたが、一桁になってまいりまして、その原因は我々の地域の中で染にかかわるお仕事をされているところが多くあったんですが、いわゆるドーナツ化現象で郊外に出ていかれるようになったり、息子さんが本業を継がないこともあって高齢化してきたということで子どもたちが減ってきた。子どもたちの将来を考えるとあかんと違うかということで、やむなく統合したわけです。

統合して地域の拠点がなくなり、子どもたちの元気な声が聞けなくなった時代がありました。正直言いまして、地域の方々にとってはその跡地がどうなるんや、というのが一

番の関心事でした。「身近用地」「将来用地」「広域用地」の3つに分けられ、本能学区は「身近用地」ということで決められたんですが、まだ、京都市から提案はしてこられなかった。その前に「職住共存地区のガイドプラン」が出てきました。それによって我々の地域を含めた堀川から東、北は御池と、南は五条、東は鴨川までの地域の中で「田の字地区」といわれるところで地区計画をしていけないということで、地区計画ということは表には出ていませんでしたが、「地域で新しいまちづくりを考えてみませんか？」という京都市からの提案が平成10(1998)年にありました。我々の地域、跡地がどうなるか、それが一番の関心事で、一般の住民の方はまちづくりはさっぱりわからん。雲をつかむようなことで「何を言うてはるんや」という声が大勢を占めておりました。

私はPTA会長をした後、前任の方から「神社係として、八坂神社の祇園祭、平安神宮の時代祭を地域で受け持っている部分を責任者として代わりにやってくれないか」と言われてお受けしまして、平成3(1991)年くらいから団体長として自治連合会の会合には参加しておりました。京都市から言ってきた時に「西嶋、ちょっと来てくれへんか」ということで、当時の連合会長から「コアのメンバーになってくれ」と言われました。その連合会長は、私と同業の組合でも理事長をされている方で、私をよくご存じの方です。私は平成に入って京都の染と織りにかかわる青年会の団体組織の会長をさせてもらったことがありまして、「西嶋やったら横のネットワークをもっているからぜひともこれをやったらどうや」と声がかかったのです。連合会長は「本能学区には、こんな小さい地域やけど、白生地を持ってきたら着物になるまで

のすべての工程があるんや」と、中京区ですが、そのことを会合では常におっしゃっていました。それを考えたら、どうや、というお話をいただきました。ただ、すぐにそのために地域の浄財をいただいて活動していくというのは、何か問題が起こる可能性もあるのではないかということで二の足を踏んでいたんです。

キーワードは新旧住民の交流と伝統産業の振興

ところがある時、我々としては一番いいヒントをいただきました。あるお母さんから、こんな話を聞いたのです。最近、マンションが建ちはじめてきた。昭和40（1965）年には所帯数は800台ですが、人口は4484人いました。それから人口はずっと減っていきまして、平成7（1995）年には半数の2440人になった。でも、いっぽうで所帯数は増えてきているんです。マンションが建ち始めてきたからです。平成7（1995）年の段階では中規模のマンションです。主は賃貸のマンションでした。1棟18戸から40戸までの規模がマンションが建ち始めてきたところで、その方が言われるには「昔は子どもたちが誰やさんのところに遊びにいくというと、その家がどんなお仕事をしていたって、どの町内で家族構成はどうやと、ほとんどわかっていた。ところがマンションができてきたら、子どもが遊びにいくというても、どんなお家かわからへん。寄せていただいて、遊ばせてもらって邪魔にならんかどうかともわからない。そういう意味ではもうちょっと顔の見える関係も、これからは考えていかんと違いますか？」と。

「染」というキーワード以前に、新しい住民の方々が増えてきた、まだまだ増えてい

く。その中で、どこでもマンション建設反対という立て看板を立てたりして危惧している。マンションにお住まいの方は表に出たら「マンションが建つ時にあれだけ反対された。町内の人が反対しはって表に出たら白い目で見られてたんと違うかな」と、こんなことを思っておられるようでは具合悪いな、住民交流を促進していくことを一番のキーワードにしていかなと、将来、汚点を残すことにもなると考えました。

ある地域では、マンションができれば20年先、30年先、廃墟になるということで反対されている。そやけど、それは違うんやないか。廃墟にするかしないかというのは、その土地に住んでいる地域の人たちがどれだけ努力していくか、それしかないんやないかということで、原因や対策を考えました。それでは住民交流を促進していくことと、我々の地域の中でこれだけマンションが建った原因は何かというと、染屋さんがなくなってきた、廃業されるようになったということです。だから空地がたくさんできてきた。それやったらこれ以上、空地をつくらないうなことを、染にかかわる仕事だけやない、地域でお商売をされている酒屋さん、お米屋さんを含めて地域で盛り上げていく、地域でそのところをフォローできるような形をつくらないとあかんということで、キーワードとしては「伝統産業の振興」も一つ入れました。その二本立てで、まちづくり委員会を平成11（1999）年12月に立ち上げさせていただきました。

我々だけで立ち上げても、我々職人が主になって話はするんですが、それをまとめて次につなげることは苦手です。そういうことから、京都市の方に3年間、担当を派遣すると言っていただきました。京都市も直接ではな

く、外郭団体の景観まちづくりセンターに任せられて、まちセンとコンサルの方々と月1回、会合を持っていき、地域をどうしていったらいいかという話し合いを当時、20名くらいから始めさせていただきました。

正直、何をしていたらいいかわからへん。事例を見に行こうと大阪の平野へ行ったこともあります。京都では西陣、吉川会長のところにも寄せていただき勉強させていただきました。平野に寄せてもらった時も、西陣学区に寄せてもらった時も、リーダーのすばらしさ、リーダーシップを一番に感じました。当然、委員の方々に対しても気配りされていますが、そのトップになっている方の資質が委員会を動かし、大きな力になっていくのやな、と自分自身では感じました。その後は、私は本能小学校の生え抜きではないけども、遠慮している場合ではない。言う時は言い、決断する時は決断し、皆さんについてきてもらえるように頑張っていくことが一番やな、ということ、2カ所に寄せていただいて感じました。これをご縁に、今も平野の松村会長、西陣の吉川会長とおつきあいはさせていただいて、いろいろと勉強させていただいています。

染の工房まち歩き

その時期の活動の歩みを説明させていただきます。勉強に寄せてもらったりしながら、どうしていいか。キーワードの「染」を出すにはと思っていた矢先に、国土交通省が全国で20カ所を「歩いて暮らせるまちづくり推進事業」に指定するということで京都市も指定を受けました。京都市はこの事業をどこへ持っていこうかということで検討されたようです。当時、職住共存地区で、うち

が委員会として立ち上がっていました。それに近い、よその学区も結束力はすべてあります。特に東では商店街の組織が学区を超えて強いです。錦市場、新京極商店街、寺町商店街、これは学区以上の組織力を持っておられる。それと烏丸より西は元学区単位で活動が盛んです。なんで盛んかという職人さんも多い、つまり、昼間、家におられる方が多いわけで、学校で何か集まる時、昼間ちょっと1時間といって、皆さんに容易に協力をいただける。そういう環境であることは我々としては恵まれているわけで、そういう地域がいいだろうと。このように、各学区の特色がはっきりしているなということがありました。

我々の地域は西ですが、その東は室町、間屋街です。だいぶん、マンション街に変貌していますが、これら地域、地域の特色を何かアピールしてもらえないか、地域の取り組みとして活動してもらえないかということでした。そこで平成11(1999)年11月、せっかくそう言うてくれはる、ということで、まだ小学校の跡地がありましたので、その学校を拠点に、講堂で職人さんのお仕事を見てもらおうやないかということになりました。平成10(1998)年には我々の地域に、ほぼ100戸を超える大型マンションが建ちはじめてきたので、こういう時に、我々の地域に来られた方々に地域の特色を見てもらうのがいいのではないかと、いろんな職種に来てもらって実演コーナーを持ちました。

その時に「道具とか設備を考えたら持ち出してできないわ」というところには「こっち側から寄せてもらってよろしいですか?」と「公開工房」という言い方でつくらせてもらいました。今までも西陣でやっておられて、「その日は公開しています」という形でやっておられますが、我々は西陣以上に小規模で

すから、2階の奥で仕事をされているとか、土間を通して奥に工房があるとかいう人もいます。そこに、不特定多数の誰が入ってきかはわからへん、そういうことで問題が起こったら困るというので、仕事を見たい人は我々の拠点に集まっていただいて、10人程度のグループになってもらい、委員会のメンバー、プラス地域のお手伝いをしてくれる方々が案内する「公開工房ガイドツアー」をさせていただくことになりました。それが今日まで続いておりまして、11月16日にもチラシが入っています。「おいでやす染のまち本能」ということで、開始当時は「染の公開工房ツアー」「匠の実演コーナー」の2つだけでやっていました。

ところが平成12(2000)年11月にはよその地域では委員会も立ち上がっていないので、室町の明倫学区、上の城巽学区、龍池学区、3つの地域の方々が「本能でやるなら、我々の地域で協力できることがあればさせてもらいたい」おっしゃってくださいました。明倫学区は江戸時代の小袖をたくさん持っておられる方が「本能に貸すから小袖の展示をしたらどうや？」ということで、展示をさせていただきました。これをする前に我々は地域の中でどれだけ着物にかかわるお仕事をされているかという調査もさせてもらっていました。

我々の地域の中では当時、一戸建てが650所帯、そのうちの190軒、約3分の1が染にかかわるお仕事をされているところでした。「まちを歩いてもらうから、職種別に色分けした旗をつくって表にかけてもらおうやないか」とすると、城巽学区の連合会長が「それやったらうちも調べるから、その旗を預かって、うちもかけさせてもらおう」という協力をいただきました。龍池学区の方は「立派

な江戸時代の小袖を展示されるなら我々が警備に行くわ」ということで4学区に協力してもらって、うちの委員会を見ていただきました。翌年には明倫学区、城巽学区が委員会を立ち上げられるようなことになったということで、お互い協力しあい、スタートできたということに対して大変よかったなと思っております。

「地区計画」をきっかけに

職住共存の多様な土地利用を誘導する

そういうことで平成12(2000)年、13(2001)年はとりあえずは動き始めたなというところでした。そういうこうしているうちに京都市から「地区計画をしませんか？」という話が出てきました。「地区計画はなんですか？」と聞くと、「地区、地区で、今後の地域のあり方を考えるんや」ということを言われて、そのためにはどうしたらいいか考えた末、アンケート調査をすることになりました。全戸配付のアンケート調査です。

調査項目の中身の検討から分析、それによってどういう地区計画をするかという議論を平成13(2001)年春からほぼ1年がかりで計画をまとめることになりました。その時期は大変ハードなことをするというので、面白くないし、委員の方々の出席率が少なくなった時でもありました。取り組みだした以上は仕方がないということですが、これをつくるために関心のある方が月2、3回集まっています。できたものが、しおりの6ページ。1枚のペーパーができあがったわけです。それを地域の方々に配りました。

「地区計画」の中の文言も一言一句、真剣に考えました。特に、土地利用の方針について、「職住共存地区、町並みに配慮して都心

活力の源となる職住共存の多様な土地利用を誘導する」という部分です。これについては、アンケート調査をし、議論したあと、京都市がコンサルタントを通じて持ってきた原案では、「中低層の建築物が望ましい」という文言になっていました。これに対して、委員会では「これは何をしているんや。そんなことを我々の地域でまとめたはずもない」と。その当時、11 階建てのマンションが建ち、建設中の 11 階建てのマンションもあるわけで、「中低層というのは何階を中低層というのや」、「定義づけるものは別になんですけど、大体、4、5 階です」、「ということは 6 階以上に住んでいる人は地域にいらんということを意思表示するのか。我々は何もハードな部分を地区計画していこうと思って取り組んできたのと違う。今後も仲良く暮らしていきたいがための地区計画を作成しようと思っている。だから、7 階以上に住んでいる人は我々の地域にはこれからいらんのか」という意思表示をしたら、折角、住民交流を促進していこうと思っているのに溝ができてしまう。そんな話は一切してない」ということを言いまして、先ほどのような文章に変わりました。

また、建築等の整備の方針では、「共同住宅の適正な管理を促進するとともに地域での住民間のコミュニケーションを配慮した建物配置、建物構造や交流空間の確保に努める」と決めましたが、ここのところが「ファミリータイプのマンションを望む」という文言でした。これにもカチンときまして、「じゃ、ワンルームはあかんのか。ワンルームがあかんというのは、よその事例を聞いている人はあるけど、我々がワンルームに対して地域との垣根を低くするために取り組んだことはあるのか。我々のまちづくり委員会では、

まだそこまでできてない。できてないにもかかわらず拒否をすることは我々としてはしたくない。努力をした結果、だめな場合は、それはそれでいいかもしれないが、今、そこまで結論を出すのはまだ早い」ということを言いました。

というのは平成 7 (1995) 年、平成 8 (1996) 年くらいまではワンルームも多かったんです。当時、地域の方で反対されたのは、ヤクザみたいな人が事務所を開くとか、東の方のホステスさんが住まわはるのと違うか、というようなことを言っておられて反対されていたんです。でも、できると、そう地域に迷惑をかけはるようなこともなかった。

ところが平成 10 (1998) 年以降、ワンルームには学生さんがたくさん住まれる。学生専用のワンルームマンションが平成 13、14 (2001、2002) 年にできてきている。それを我々としては、なぜなんやろなど、はじめは思っておりました。学生さんは学校に行くだけでなく、アルバイトへ行くのに利便性が高いところが望ましい。利便性だけでなくアルバイト先もたくさんある。特に我々の地域はすぐにアルバイト先は見つけやすいということがあって学生さんがたくさん入ってくるのだとわかりました。

そんな学生さんに対して、我々地域で何か考えられないかと考えました。本来、下宿をしてもらおうと、その生活文化を味わってもらいながら 4 年間生活してもらえますが、ワンルームであれば、そのきっかけはなかなかできない。せっかく我々の地域に来られたんだから、町内の方と仲良くしてもらえように何かできへんか。我々の地域では八坂神社の氏子の地域ですので、町内では春は八坂神社にお参りに行かれたり、町内にはお地蔵さんがあって、地蔵盆には町内の人が集まっ

て、子どもたちや、親は親で交流をしたりします。そこに学生さんと呼び込んで学生さんに企画してもらったら、新しい地蔵盆ができるのではないかな。区民運動会、若い人がいなくなったというなら、そういう人たちに出てもらったら町内も活気づくやんか。それをするためにはどうしたらええのか、これから我々は考えんならん。そやのに「ワンルームはだめやということは我々は言いたない」ということで、こういう文言に変わりました。

ワンルームへの取り組みというのはやっていますが、なかなか地に足がついていっているような状況ではありません。それ以上にファミリータイプの分譲マンションが多く建ったので、町内自体がマンションの方々を中心に回っている町内ができています。祇園祭の蟠螂山が我々の学区にあるんですが、蟠螂山の保存会の理事長を、マンションにお住まいの方が一昨年からされています。そういう形で巡行にもマンションの住民の方々も参加されるようになってきました。これは、今後もっとよくなっていくようなことかなと思っています。

まちづくり委員会の核は

「住みたいまち、育てたいまち、働きたいまち」

ただ、この文章だけを、なんぼ地域の方々にお渡ししてもわからへんやないか、ということで、何か皆さんにわかってもらえるものをつくりたいなと「本能学区のまちづくりのしおり」を1年間かかってつくらせてもらいました。1、2ページは今までの話のようなことです。3、4ページは我々の地域資源はこんなものがあると説明しています。5ページは概況です。人口の推移やその中で京染にかかわる仕事をされている家の軒数では190

軒ありましたが、これを調査した時には40軒くらい減っていて、現在150軒くらいです。当時、マンションができてきたということで、円グラフでみると、大型マンションが2000年以降ほぼ75%になっています。棒グラフは、地域の情報をまずは伝えないといかん、その入る方法をどうしたらいいかということで、現在どうなっているかを示しました。掲示板が最適かなと、エレベータの中に掲示板をつくってもらうとか回覧してもらえたらいいなと思います。それも今後、徐々に進めていきたいなと思っています。

7、8ページ。我々が今後、地区計画をし、我々の地域が仲良く暮らしていくためには「住みたいまち、育てたいまち、働きたいまち本能」であることを大切にしたいと考えています。住みたいというのは、皆が本能学区やったら仲良くしてはるから住みたいな。本能で子どもを育てたら地域の協力がある、働きやすいまちであってもいいなという、この3つを目指してやっていくべきかな。このページがまちづくり委員会の教科書やと思っています。

まずは、お付き合いを大切にして暮らしてきた文化をこれからも大切にしたい。そのためにはどうしたらいいか。お互い挨拶のできる関係づくりをしませんか。これは当然、マンションにお住まいの方々、分け隔てなく挨拶ができるということ。町内会に入っていたいて、町内の活動に参加してもらう。子どもさんができたら公園デビューの前にひなたぼっこに表に出てもらって挨拶ができる関係ができたらいいなと思っています。地域の活力でもあった地域の産業、これもお住まいの方々にも協力をいただいてやっていけたら、よりすばらしいなということです。そういうものがうまく機能していき、地域が共

有していけるようになったら、調和のある町並みを求めていきたいということにつながっていくのではないかな。

我々自身の力で、できる範囲の京都らしい町並みは、そういう気持ちの共有ができてこそ初めてできるのではないかなと思います。紅柄格子（べんがらこうし）の家は京都らしいなというのは当然だと思います。ただ我々が20年、30年前に家庭を築いていくのに憧れたのは何かというと、隙間風の吹かないような家や、便所に入るのも庭の風を受けながら入らんならんよりも、ワンフロアで過ごせるような家でした。おかげで下水の整備ができ、台所と居間が一体化できるようになりました。それまでは皆、土間があったわけです。本当に皆さん、町家ばかり望んでおられるのかといえば、僕はそうではないと思います。それを望んでおられる方もあるけど、でも一歩、家の中に入れば快適な空間をつくっておられても、表はせっかく、地域がこういう取り組みをしてはるんやったら紅柄格子にしておこうやないかと、一人でも多くの方に言うていただけるようになっていったらいいなと思っています。

いくつかの取り組みから

今、取り組んでいるのが、玄関に伝統色ののれんをかけていただく、それがチラシの「日本の伝統色、本能に咲くのれんの華スタンプラリー」です。これをやることによって、少しでも本能らしい、京都らしい町並みをわかってもらいたいと思って、取り組んでいます。これが我々の地域全体に広がっていったらいいなというので、今は「のれん里親制度」、のれんを預かっていただいて「今日、出してほしい」という時に出示してもらえたら

いいなと思っております。出示してもらおうといっても、我々のメンバー、委員会のメンバーには地域の方だけでなく京都府立大学や、立命館大学のゼミの学生が勉強にきておられて、その方たちがスタンプラリーを担当してやってくれています。各町内を委員会のメンバーが担当して学生さんと一緒に朝の8時頃からのれんをかけにまわりますが、ポツとかけるところばかりではないんです。針金をかけないといかんとか、大変なんです。預かっていただいて家の方に簡単にかけていただいたらいいなということを、今、アンケート調査しながら進めています。そして来年3月、京都市伝統産業の日にはもっと広がった学区全体ののれんの華ができるようになったらいいなと思っています。200枚、300枚できたらいいんですが、予算の関係で一気にはいきませんので、予定では100枚くらいは地域の中でできてきたらいいなと思っております。

「本能学区のまちづくりの方針」は、のちほどゆっくり見ていただいたらいいと思います。マンションでこういう事例がありますよということです。たとえばお地藏さんでもマンションができる時にマンションにお地藏さんを置かせてほしいということで、町内の意向を汲んでマンションも協力されているところとか、祇園祭の収納庫をつくっておられるところとか、いろんなことがあります。

11、12ページ。これは地域の思いで少しでも工夫して、改築される時には少しでも京都らしい町並みになるように考えてもらいたい。去年、景観条例を京都市が打ち出しました。我々としての規制はないですが、京都市はそれ（冊子）によって規制をつくったところではないかと思っています。13ペー

ジ、共同住宅の場合は、分譲であっても、賃貸であっても、管理組合がポイントになってきます。特に管理会社がポイントやと思っています。分譲の場合は管理会社の指導で管理組合の規約のひな型をつくっているだけで、入居されている方々で独自で規約をつくっていけるのは、なかなかエネルギーが集まらず、そこまでできないと思います。そういう意味において管理会社に「我々の地域はこうや」ということをわかってもらいながら地域性のある規約を出してほしいなと思っています。

賃貸については学生マンションについては、生ごみ、これは「業者がとりにくるから地域に迷惑をかけません」と言うんですが、それは逆で、学生さんが生活していこうと思ったら地域のルールをわかっていかんことには社会人になれへんと思うのです。つまり、何日の朝、何時までに、ごみを出さんならんということくらいは一人で生活するにはあたりまえのことで、それを過保護にしたらかんということです。違う時間帯に出した時に地域の人に怒ってもらい、それによってコミュニケーションが生まれる。そういう関係づくりをしていかないとあかんのに、そこで溝をつくってしもうたら、終わりだと。私の立場として、よく町内でマンションを建設される前に町内との協議に入る時に寄せてもらおうと、必ずそのことは言います。そういうことによって社会勉強もしてもらえ、地域の町内が下宿先やと思ってもらうようになったらいいのと違うかと思います。

14 ページ。地域ではこんな活動をしています。どうぞ参加してくださいと書いています。そういうことをやっているまちづくり委員会、ぜひとも委員会のメンバーにもなっていただきたいと。これについては当初の部数

がなくなりましてコピーしていますが、最近、新しくできたマンションの方々すべてには案内のお渡しはできていません。ただ、業者には建築確認申請を出された時に、本能学区で建築をされる場合には京都市から必ず渡していただいています。建設される時にはどこの町内で、どれだけの規模で、という図面を私どもに持ってこられます。まずは町内会の方とコンセンサスをとっていただき「むりのないように、いさかいの起こらないように十分配慮して建ててください。建てた後にはこういうことを地域は望んでいますから、そういう管理会社をよろしく願います」というふうに申し上げています。

土山 まちづくりの「しおり」をつくっていかれる中で、どういうコンセプトが地域の中でつくられてきたかということと、のれんを核にした取り組みの話がありました。地域でされている年に2回の催し物については今からパワーポイントでご説明させていただきたいと思います。

おいでやす染のまち本能

西嶋 印染とか馬場染工とたくさん染屋さんの看板が上がっていたのが、マンションがたくさん建ち、町家と並んでいるということです。その下に委員会を立ち上げました。2000年、我々が調査した時の空地とガレージ、それが5年後にはすべてマンションに変わりました。空地でなかったところにまで建っているのがおわかりいただけたと思います。2005年ですから3年後には、またプラスしています。

2000年から「おいでやす染のまち本能」、はじめは秋だけでしたが、イベントをしています。広くアピールするようになったのは最

近ですが、何か活動することによって結束力も生まれて、地域の協力も生まれ、存在をアピールすることにもつながっているということです。

グループになっていただき、はっぴを着ている人が案内していくところ。職人さんの仕事風景を職種によって見てもらっているところ。82、83歳の金彩工芸の方。「いつもありがとうございます」と言う。「この歳になっても公開工房に見に来てもらえるから」と喜んでいただいています。職人さんに集まってもらって、子どもたちに実演コーナーを見てきてもらっています。

土山 メイン会場は小学校跡地ですが、今はどんな施設に？

西嶋 堀川高校の附属施設と特別養護老人ホーム、ベッド数が90、ショートステイが10、デイサービスが30人程度の施設です。それと地元施設ですね。

土山 跡地利用が地域の方の大きな関心事だったとのことでした。跡地利用についても、まちづくり委員会はかかわっていますか？

西嶋 当時のまちづくり委員会の地区計画を進めている時に、並行して「跡地活用推進委員会」ができ、私も副委員長をやっています。月にコアのメンバーが2、3回集まりまして、全体委員会を月に1回やる。コアのメンバーは京都市の方、跡地に特養ができることが決まってからは設計事務所の方も一緒に話をしていました。設計事務所の担当の方が、できあがった後、本能学区に住みたいということで本能学区のマンションを購入されて「今度、この学区に来ます」「そんなら委員会のメンバーやな」ということで翌月から委員会のメンバーになっていただき、新しい企画をやってくれます。こういうことも

すべて彼がつくってくれています。すごく強力なメンバーになっています。

土山 学区の跡地利用で議論や対立はあったんですか？

西嶋 それはね、「町中になんで特別養護老人ホームが必要なんや？」というところから議論になりました。反対される方は何でも反対されますが、私も本当に必要なのかという気持ちもありました。まだ介護保険制度もできていない時代で、家族でお年寄りを老人施設に入れることはあまり近所の人に知ってもらいたくない、という時代ですから、そーっとしてほしい。ところが近所にできて、近所の人がそこに入った。その家族の人はどうもないのかなということを思っていたんですが、介護保険制度ができてきてからは社会全体でみていくというのが、皆さん理解できているので、ある意味では、できてよかったな、と地域の方は皆、言っておられます。

土山 特別養護老人ホームにしようというのは地域で決められたのではなく、市から下りてきたということですね。それをめぐって議論があった。そこには、委員会がダイレクトにかかわっていたのか、それとも検討する委員会を別に組織されたのですか？

西嶋 跡地活用推進委員会という地域の組織が窓口です。

土山 地域の組織はどういう構成で議論されたんですか？

西嶋 跡地活用推進委員会の委員長は自治連合会で決めました。我々団体長が入る。あとは町内会長が中心。ですので、近隣の町内の方は複数が委員ということです。

土山 京都市が地域で決められた時の枠組みみたいなものは？

西嶋 それは勝手にこっちで決めました。

土山 そこで議論された経験で、その後の

まちづくり委員会に生かされたことは？

西嶋 委員会も活動しているので、途中で取り組みを見に来ておられるか、新しい施設の中でまちづくり委員会の取り組み、他の各団体の活動が今後も続けていけるような施設の構造を考えてくれましたので、近隣の学区からは羨ましがられているわけです。今後、うちと同じような施設がよその学区でできるかというとなかなか難しいくらい、頑張ってもらったと思いますね。

マイキモノプロデュースについて：5年ほど前、職人さんから、「仕事を見てもらうばかりでなく、産地へ来てもらっているので産地で着物を売ってくれないか」という話があり、それやったら我々の地域の職人さんが作れるような安価でできる着物を提供しましょうと、10万円程度で詠えられるコーナーを設けました。展示してあるものは皆、京都府の伝統産業産地支援事業というもので、100万円いただいてサンプルを我々の職人さんにつくってもらって。当時、17、18点できていると思います。それを見てもらいながら自分で好きな色を決めてもらったり、こういうふうにしてほしいとか、聞いてつくっていただく。土山先生にもつくっていただいたりしています。

体験教室について：これは職人さんに指導してもらって、絞りの帯揚げの染色を勉強してもらっているところです。

のれんスタンプラリーについて：立ち上げた時から色分けした旗を出す以前に「のれんを出したいな」と思っていたんです。財源がなかったのですが、「都市再生モデル調査」を国交省から採択されまして、国の予算をいただきました。この冊子をその時の財源でつくりました。私たちの考え方は「のれん」というと本能まちづくり委員会とか信長に関

連したのれんとかしか頭に浮かばなかったのですが、設計事務所の彼はいろいろ考えてきてくれまして「日本の伝統色を染め抜いたのれんをつくれば、いろんなのれんができますやん。それをかけたらどうや」と。その時、スタンプラリーまでいっていません。「それはいいかもわからんな」と、『日本の伝統色』という古い本を見ながら色目も偏らないように、面白い名前、読みにくいものもつくりました。色の名前はリストで入っています。それをつくっていくことによって「これは子どもたちにもいい勉強になるな」と、「本能に咲くのれんの華」ということで、スタンプラリーを始めました。そののれんのところに行って、海老茶色の色をしたスタンプを押せば平仮名で「えびちゃ」と読めるようになる。これができあがったら、（見本を示して）このようになります。40色ですが、皆、読めなかった字でも「とくさ」「あさぎ」と読めるようにひらがなにしておいてスタンプにしています。途中でやめはる人はまずないです。ほぼ1時間くらいかかりますが、押しだすと皆さん、最後まで押して帰られます。

これを地域の統合した小学校、中学校に呼びかけて、来てもらってやったらどうかと働きかけたところ、小学校も「ぜひとも子どもたちに参加を呼びかけていきますわ」ということで、スタンプラリーに行く前に一回、ワークショップを開きましょと、小学生・中学生にのれんができるまでの工程を体験してもらいました。30人ほどの参加でした。それに基づいて地域の小学校、中学校に呼びかけて、油小路通りを昼まで通行止めにしてもらって、子どもたちがやる。皆、こうやって喜んでいただいているところです。それができあがった。これは去年春、NHKのお昼の番組「生中継 ふるさと一番」で中継して

いただきました。鹿沼アナウンサー、彼は京都支局におられて「京都で本能学区の取り組みをやるんやけど」と企画会議があった時、「ぜひ私にやらせてくれ」と言わはったそうです。なんでかという、ここの拠点の向かいにお住まいなんです。同じ町内のマンションの住民です。自分からアナウンサーになってくれました。今は東京に行かれましたけど。

子どもたちがやっている中で、校長先生らが「うちにものれんほしいな」と言っておられまして、去年、日本イベント大賞に設計事務所の彼が「応募しましょうか」と。正直いって「こんなあるよ」と言うてもろうても、僕らが資料を揃えたり、応募用紙に書いたりするのは全く苦手ですから、それを言われたら到底やりませんが、言うた以上は彼がやるんですね。彼はうまいことポイントをずらさんとやってくれるから、イベント大賞の大賞候補と制作賞と二つ区分があって、二つとも最終候補にノミネートされまして、去年11月20日と27日、東京で部門毎のプレゼンがあったんです。20日は大賞候補、27日は制作賞です。27日は優勝したら100万円くれます。20日は名誉なんですね。「どっちもらおうか」「そら100万円やで」。100万円の方には彼と僕ともう一人で行って、20日には副委員長が行ってくれました。27日にはそれこそ、行きの新幹線の中では着くまで7分間のプレゼンを、時間をきっちり合わせて何回も練習した。でも、そんなうまいこといくはずがなくて、プレゼンテーションが早く終わってしまった。ところが早く終わったおかげで、質問を多くしてくれるようになって、質問の時、「100万円をもらったらしはるんや」と。その時に「小学校、中学校の先生方が、のれんがほしいのやと言うて

はります。『どこにかけはりますか?』と聞くと、小学校、中学校にはトイレにドアがついてないそうで、『ちょっと目隠しになるようなのれんがかかっていたら、すごくいいんやけど』と。『何箇所あります?』と聞いたら、『1校で17、18カ所ある』と。それで、『大変やな。今度東京に行って、もしも100万円もろうたら、つくりますわ』と言うてきたんです」と言うのと爆笑になってね。後で審査員の方に聞いたら、どんでん返して、それで決まったらいい。現在のはのれんをつくって、小学校、中学校、ここの施設の特別養護老人ホーム、ここは10人が一つのユニットで生活されている。そこの玄関にのれんをプレゼントさせてもらう。そのことによって今回も小学校の方から「今年もスタンプラリーに参加したい」と言っていました。小学校が中学と合同で案内状も各戸配付を勝手につくってくれはって、うちに当日、何名やということでも来ってもらうようになっています。大変ありがたいなと思っています。

アンケート調査をしたことや、月に1回は必ず1日に定例会をやっています。土曜日、日曜日が1日であれば翌週の月曜日が定例会と決めています。誰でも来てもらったらいし、地域に住んでおられようが、そうでなろうが、興味のある方は来ていただけたらいい。1回来たら、ずっと来ないといかんと思うこともないし。イベントの時だけお手伝いいただくことでもありがたいことやっております。これはイベントの後の打ち上げです。

年6回、ニュースを発行しています。お手元にお配りしているのは、最新版と去年の取り組みを載せたニュースです。地域にはマンションにお住まいの方々を含めて全戸配付しています。現在では2500部印刷して、

2000枚少しお配りしております。お年寄りの方にも「毎回、楽しみや」と言っていたりして、広報部会の方が頑張ってやっていただき、そのことで喜んでいただいております。私はできる前に原稿を見てチェックさせてもらう程度しかかかわっておりません。私がよそに行った時、広報部会の方が取材についてこられて写真を撮られたりと、よくやっています。これが地域の中で情報を伝える一番の役目をしているものやと思っています。

第Ⅱ部 クロストーク

新しい人をどしどし登用

土山 まず私の方から質問をさせていたきたいと思います。一つは、まちづくりにおいて人をどうやってつないでいくか。難しいことですし、それがその後、地域を変えていく要素なんだと思いますが、新しいマンションの住民の方がどういうふうにも本能学区のまちづくり委員会に入ってこられて、どんなふうにも活動されているか。新しい活動を担う方を迎える時に気をつけられていることは何かありますか？

西嶋 皆さん、思いは違う部分もあると思いますが、僕自身が年功序列という制度が嫌いで、旬の時に動けるような場面を自分自身は与えてほしかったし、それを与えるべきだろうと。ところが京都の古い体質の中では、どこに行っても年功序列で、旬を過ぎてからでないと役割を担うことができないということが多々ありまして。それでいい部署もあるんですが、地域でまちづくりをする、未来に向かって考えようという時には、当然、新しい人材がたくさん入ってきてもらうこと

が一番大切なことやと思います。その方が一番得手とされているところを、うまくキャッチして動いてもらえるように仕向ける、そういう部署をお与えするというのが一番大切なことやなど。それを見抜くのが大事です。それには、設計事務所の方とか、小学校、中学校、特別養護老人ホーム、それ以外に今までにかかわった人で「この人にはこんなことを頼んだらやってもらえるのではないか」ということを、より早くキャッチしておいて、自分の懐に入れておくと、そういう場面に遭遇した時には役立つので、人の特徴を早くつかむことが大事かなと。それをつかむことによって、その人にもいきいきしてもらえます。女性の方は引っ込み思案の方がおられますが、特にうちの学区では幅をきかせてはる地元のお母さん方もいはるわけですね。昔、女性会があった時でも、女性会の会長は生え抜きの人がされていました。女の人の生え抜きというのはご養子さんをもろうてはる方でしたが、この方中心でやっておられて、その人をおいて、出しゃばって前に出ることは到底できなかった。だから女性会も地域ではなくなつたのやと思います。

新住民の方が増えてきて協力体制ができました。今までなら腹では文句言うていて、表向きはね、立ててやってきた。そういうことは、将来を考えたらいい環境ではない。そのためには新しく来られた方でも主役を先にさせていただく。まちづくり委員会でもボンと受付に先に出てもらう。平成17(2005)年に新しい施設ができた竣工パーティをやったんですが、まちづくり委員会が受付を担当する。以前、その受付場所には地域の敬老会とか、どんな会合でも長老が受付に並んでいた。そんなことはやめようと。「なんであの人が、そこにいはるの？」と聞かれても、

「まちづくり委員会のメンバーやということ
で座ってもらいました」と言うのも文句を
言わない。それによって、またいろんなと
ころで活躍してくれる。

委員会ではないですが、地域で今まで選挙
の時の受付は、結構、年配の方がしていま
した。前回の選挙から、市長選やったかな、今
年成人した人にやってもらおうやないかとい
うことになりました。若い人、20 歳にな
ってすぐの学生さんですわね。朝 6 時半集合
で夜 8 時半までで 1 万 1000 円か 1 万 2000 円
の日当をもらって、朝ご飯もよばれ、昼、夜
は我々で用意して、やるのは受付ですから、
若い人は簡単なことです。年寄りやったら大
変なことです。一方若い人は喜んでやってく
れる。それによって来られる方も「地域は変
わったな」と思ってもらえるようになった。
これは改革やなと思います。多分、今後、そ
れが続いていくやないか、若い子にしたら
「また選挙ないやろか」と言うてくれるよう
になってね（笑）。

土山 頻繁に新しい方が来られる状態
ですか。コンセプトを掲げられても、実現す
るのはなかなか一筋縄ではいかないところも
ありますが。

西嶋 それはね、まちづくり委員会が若返
って、若い人がたくさん来てくれることも確
かにありがたいことやけども、それは狭い考
え方やね。そうではなく、まちづくり委員会
ができて活動していることによって、地域の
区民運動会が変わっていったらいいなと
我々は思っているんです。

従来型の旧体制の感覚で区民運動会をし
ていたのを、まちづくり委員会から提案し
て、一昨年からうちに勉強に来ている立命
の学生さんを派遣しようということになりま
した。まちづくり委員会がなんぼ偉そうなこ

とを言おうが、住民交流を促進している事業
で、一番地域で大きいのは区民運動会です。
これは我々も、それがより活発になっていっ
てくれることを望んでいるわけです。そやか
ら、区民運動会に新住民の方が出てもらえ
るようになっていったらええなということで、
3 年前に区民運動会のアナウンス、実況を立
命館大学の放送部の人に来てもらって、ボラ
ンティアでやってもらうことになりました。
かける音楽も変わってきたね。今までは行進
曲みたいな、パチンコ屋に行ってるような曲
がかかるとやけど、ビートルズナンバーが出
てきたり、若い人に耳障りのないような音楽
がかかってくる。我々の発想とは違うものが
出てきたら、若い人もたくさん参加しはる。
去年からはまちづくり委員会で、うどんコー
ナーをやるようになりました。自分たちがや
らないとあかんのではなく、地域の活動が活
発になったらええ、我々はそのパイプ役にな
ったらええと思っていますから、区民運動会
が活発になってきたのは、すごくありがたい
ことやなと思っています。

堀川通りに 70 戸のマンションができたん
です。その町内は運送会社があったり、大き
なお酒の間屋さんがあったりで町内の住民
は 4 軒しかなかった。それで区民運動会では、
隣の町内と合併されていた。ところが、マン
ションができることによって、今年、もう一
度、町内として再建をされたんです。4 軒で
は区民運動会ができない。でも、マンション
の人の中で管理組合をつくって、その町内で
区民運動会に参加しようやないかと。今年初
めて区民運動会に参加したにもかかわらず、
総合 3 位に入りました。30 代が中心で子ど
もさんがまだ小学校に行っているかどうか
のご家庭の方が多いですわ。そのマンション
が売りに出た、これから建てるという時に、

表に看板を出した。「高倉小学校、御池中学校校区」。それだけで即、売れている。子どもさんをもっている方が中心に入っているから、敬老者が要るような種目は人数が集まらんけど、若い人は集まる。そのことによって他のマンションとか町内会も刺激を受けるようになって、多分、来年はもっとマンション同士の競争が出てくるのではないかと思います。それが、またいいことやなと。

土山 区民運動会にもマンションの新しい住民の方が多くかかわる状態が、できつつあるということですが、まちづくりを進めていこうという時に、どこかで「人が手伝いにいっぱいきてくれるようになったな、新しい人が参加してくれるようになったな」という时期的なタイミングはありますか？

西嶋 タイミングね。まあ、平成12（2000）年に学校の跡地があった時代に始めたわけですが、あれだけの実演をしてもらえる職人さんを集めることとか、公開工房で案内人になってもらうのに地域をよく知っている方をお願いできるとかは、正直、僕だけの力では、たぶんできなかったと思います。副委員長が二人いまして、一人は私と同年で今まで地域で何もかかわっていなかった人です。そやけど実務的にはものすごく動いてもらった。もう一人は僕より一回り下、その人は消防団にも体振（体育振興会）に入っている、その中でも行動力のある、地域でも信頼されている好感の持てる青年です。彼を副委員長にしたので消防団や体振からは怒られたんです。「お前、これからうちで使う人間を先に使ってもろうたら困る」と。でも、「怒ってくれるような人でないと僕は使わへん」と。イベントをする体制づくりには、彼はすごく影の力があるし、それ以外の方々はニュースを見て協力をいただけるし、今回の16

日のイベントは、手伝ってくれる人にお昼のお弁当の注文を出したけど、70人ですわ。去年は110注文がありましたという話でした。去年、110人、お手伝いいただいたんやな。我々地域のイベントでそれだけ地域の方が手伝ってくれるというのは、他にあまりない。それが皆、楽しんでやってもらっているから、毎回、来てもらえるんやないかなと思います。和気あいあいと好きな時に「次、案内に行くわ」という感じで言うてもらおう。その間は自分も見てもらったり。その時に地域を知りたいと思ってきてくれる人もあります。自由にやってもらえるので、ありがたいなと。

土山 人数ですが、レギュラーの方、コアメンバーの方は？

西嶋 委員会のメンバーは30名ほどです。30名のうち20名は、ほぼどんな時でも来てもらえるメンバーですね。あと学生さんが立命は1学年に4、5人で、3、4回生で8人から10人。府立が毎年3人くらいですね。

何かあったら僕が責任をとる

土山 それとは別にイベントする時にサポートの方がおられるということですね。次の質問ですが、まちづくりの継続性を考える時、誰かに負荷がかかると継続しにくいかなと。負荷がかかるというのは、それがやり甲斐というものもあるでしょうが、負担になると少し難しいところがあるかと思います。その意味で一番大変なのは西嶋さんかなと思います。ところが西嶋さんはまちづくり委員会の話をされる時、楽しそうです。継続的にやっていくところで何か無理なく続けていくところで気をつけられていることはおありですか？

西嶋 あまりね、ないんですけどね。どんなことでも、あまりやる前、行動に移す前から考えないというようにしています。考えたとしてもスタートが遅れたり、また気持ちが入らなかったりするの、とりあえずは思いついたら行動に移そうということでやっていますし。万が一、事が起こったり、失敗したり、迷惑がかかったりしたら、謝ったらええだけやから。ほんま、それしか考えてません。

去年秋、油小路通りを歩行者天国にした。これはある種、京都市とちょっとかかわったんですね。「小学生がこれだけ来るから、警察署に相談に行きましょか？」と言われて一緒に行ったことが藪蛇で、「1週間前にどこどこに看板を立てなさい。当日は警備保障会社のガードマンを3人配置しなさい」と言われました。そんなこと言うたばかりにお金はあるわ、時間はとられるわね。でも、言われたとおりにやった。もちろん、地域の交通対策協議会のメンバーに頼んでいるし、学生さんにも安全対策で道路を十分警備しているんですけども。地域の交対協（交通対策協議会）の人よりもガードマンは頼りないね。ただ立っとなだけ。そんなんにお金を払って、地域の浄財をこんな無駄なものに使うのは納得いかん。というわけで、「今年も警察に行くのか？」と聞かれたら、「いやいや、行かへん。あくまで来はった人は皆、自己責任や。当然、怪我はしないように最善を尽くすけども、それこそ僕自身もどこで何があるかわからへんの、そんなことを心配したって始まらへん。万が一のことがないように我々は最善を尽くす、それでええのや。屁の突っ張りにもならんようなものに金はいらん」と皆の前で言うと、それで皆、安心するわね。「何かあったら僕が責任とる」と。今

日も電話で「保険は？」と。でも、「保険も一緒や、保険もいらん。道路でするんやから。道路は当然、車も自転車も通るのがわかってはるはずやから。もしも、そこで怪我をしたと、親が言うてきたら、それは親の教育をしんならん。それをごもつとも言うから、親が間違うていくがな。そんなん、怯えていたらあかん」と。

土山 西嶋さんらしいご回答をいただけたなと思いながら伺っていました。では、皆さんからのご自由に。

お仕着せでないまちをつくりたい

大矢野 地区計画の呼びかけをもって役所から来た。地区計画というのは、あるべきまちの姿をどうやって住民とルールをつくりながら、その地域に形成していくかという制度ですよ。そのためにコンサルタントも入る。外から来た人たちが「このまちはこういうイメージだ」ということは、よくありがちな話ですけど、それと実際に皆さん方が生活している生活実感が若干ずれていた。このずれをどうやって埋めていくか。役所サイドからいう、本能学区の持っている伝統的なまちをうまく生かしつつも、現状とどう融合させていくかというのが、西嶋さんたちがおやりになった活動かなと理解しましたが、そういうことで基本的にはよろしいですか？

西嶋 「地区計画」、ハードに関しては、我々地域住民が地域の方々へ示すものではないと、私は思っています。地区計画はそういうもんやという人も当然おられるわけです。規制したり、規制を加えたりするのは、当然、行政がやるべきと。しかし、ソフト面で地域が納得いくような地域の仕組み、取り組みを考えていくのが、我々地域の住民や

し、それを何も行政のせいにしたくもないですし、我々の地域は我々地域の責任の上で活動していったらええなと思います。

特に景観の問題については、一部の方は「もっと地域で、こうすべきやないか」と言われます。町並みを連続性のあるようにとか。そんなん、隣が家を直さはるのに「おうち、そんな直し方をしますのか。そんなん、あきませんで。こうしなはれ」と言えますか。財源を持ってきてね、「それやったら、ここにこれだけの財源があるから、こういうふうにしはるなら、この財源使えますよ」という仕組みができていなら、我々も提案はできる。何もないところにそんなこと誰が言えますねん。自分とこは自分とこで住みやすいように変えはるのはあたりまえやないか。それは京都市がしはったらいい。京都市は地域の声が上がってきて、そうしようと思っているけど。

大矢野 そうそう。そこを、どう埋めるか。お互いが、住民の側からも、今までもっている本能の町並みを生かしながら、マンションの持っているものと180度違うものではなく、うまくギリギリまで馴染むような、住民の皆さんからも「望ましいまち」という思いは一方ではあるわけですね。しかし「高度制限をこうしろ」とか「壁はこういう色合いにしろ」とか「セットバックしろ」とかまでは、お互いの領分で建築をやっている、まさに私有財産ですから、そこを強制することはできない。

西嶋 「地区計画」の基本計画を地域全体で、町内で、整備計画まで進めようと思うたらできますよ。整備計画まで入れば。それは当然、規制はできるはずなんやから。我々は「基本計画」は提案をただけで終わっているから、別に何ら法的な規制もないわけで、

ただそこができなかったら「整備計画」まで入れないから「大いにやってくれはったらいいですよ」と。

たとえば堀川通りに面している家は、今は31メートルに低くなりましたが、当時は45メートルまで建てられた。裏一筋目までは45メートルまで建てられる範囲やね。ところが、その裏の道があったら、裏の道はセットバックも何もしんでいいわけですね。幹線道路に面した規制の中で建てたら裏の道がボンと壁になっても、何らその町内の人々が文句を言われても、法に則った建て方をしているわけやね。たとえば堀川通りはそれでいいけど、裏の道に入ったところは道として、その生活空間を守るためには、その町内の人々が「うちもよその31メートル地域と同じように、前の道をしたいんや」という合意があったら、そこはセットバックしないと建たんようになるわけで、「そこは町内で考えてほしいですよ」と。それを「地域全体でまとめろ」と言う地権者もいれば、財産権の問題もある。そんなもん、1年、2年でまとまる問題ではありませんし、実際、それがいいのかどうかも、わかりませんけども。規制をしたら規制したで、絶対、そのフォローはしないとあかんと思うんです。

大矢野 それは役所からするものですね。ただ逆に言うと、のれんの話とか、それはそれぞれののれんをかけることによって、住民の側からこのまちについてのイメージ、「まちはこういうふうにしたい」とか、そういうことが沸き起こってくる一つのきっかけづくりと理解してもいいわけですね。

西嶋 そうですね。

大矢野 そういうプロセスの中でどこまでやれるかどうかわかりませんが、今の町並みは、町家の風景とマンションがニョキッと

出ている。その間のアンバランスがある。でも、今はできないけど、それが将来に対して住民の側からルールをつくろうとか、そういう動きが、可能性としては出てくる余地はあるのではないかと？

西嶋 そうです。去年の景観政策の中では「1階に塀をつくれ」ということもできていますので、「じゃ、我々の地域だったら、その塀にのれんをかけられるようにしはったらもっとイメージがよくなるのと違うか？」という提案はできると思うんです。個々の家でものれんの似合うような改築の仕方を考えてくれはったら、だいぶ違うのではないかと。

土山 西嶋さんのお話を伺っていると、住んでいる人がベースですよ。町並みの景観でも「中低層が望ましい」となると、高層に住む方の立場ではないが、否定することは筋としてありえないと。このように、そこに住んでいる人たちがベースになっているという印象を受けます。のれんが似合うような町並みが、ああいうのれんをするのは素敵だねというのが、町並みにつながっていくか。バリアフリーとかリフォームする時に「こういうふうにするとのれんが似合う家になる」というモデルタイプを出すことはありうるかなと。

大矢野 というのはね、西嶋さんが人と人をつなぐとか、マンションの住民については、この地域の特異性というか、小学校のブランド名があるのではないかと思います。それは置いておいて、今の時代の中で、まちをもう一度、今まで蓄積してきた伝統と新しく住んでいる人たちをうまくつなぎながら、お仕着せのものではない、自分たちで何かをつくるようなきっかけ、機運を常につくっていききたいというのが、どうも西嶋さんの願

ではないかなと。

西嶋 まちづくり委員会の事務所を、マンションの集まりとか集会所に使いたいという申し出があったら提供してもいいなと思っていますし、今回、アンケート調査でも「のれんでつなげよう本能の輪」というのをタイトルにしているんです。

職人同士の横のネットワークができてきた

大矢野 もう一点は、にもかかわらずと言うか、職人さんがお住まいになって、そこで仕事をなさっている。それは僕ら第三者からすれば、それはそれで継続していったほしいという思いがあるわけです。西嶋さんの話だと工房が開放されることによって、職人さんも自分の仕事のエネルギーになっていると。そのとおりだろうと思います。しかし、そう言いながら確実に時間の経過の中で職人さんが減っていつている。これもまた紛れもない事実だろうと思います。一定程度、残してほしい、残ってほしいということについて、何か、それなりのご努力、手だてをお考えになっているのでしょうか？

西嶋 業界に関しては私もかかわっているわけですが、地域でどこまでのことを職人さんに対して取り組みができるかということ、地域では限界があるなと思っています。それは業界団体の中でやっていかないといかん問題やと思っています。ただ我々の地域は、もともと利便性があり、室町に近いということで、小回りがきく、ロスがない仕事の回しができるということがあったわけです。それが郊外なり、離れていかはったところは、もう仕事を辞めておられるところが多いですが、割合から言うと、この地域は、まだ仕事

りは多いです。しかし、今までは職人はあぐらをかいていた。それに甘えることなく、仕事は持ってきてくれはった時代から、「自分たちで動かないとあかん」と思っていたことが、この取り組みで始まっているわけです。あとは横のネットワーク、案外、業界でも縦割りやったんですが、地域に横のネットワークが出てきた。お互いに仕事の紹介をしあっていることもできてきているのでね。それをもう少し業界全体で行けるように、私も今年いっぱい委員長は降りますけれども、業界の方で中心になっていかんならんな、と思っています。そうやってきたら、そこは影響力がある、地域性というものを業界からも出していき、地域とコラボできるようになっていったらいいなと思っています。

住民自身がまちを再発見

土山 染め物産業と地域とのかかわり。最初、まちづくりをされる時は染め物のまちは前面に出さないでいこうという戦略だったとうかがいました。何回かイベントに参加して、今は染め物にかかわっていない方にも「染のまち」と受け入れられているような雰囲気だと受けとめています、そのあたりの変化とか、なぜ、そのようにスタートされたか？

西嶋 なぜスタートしたかという？

土山 染を前面に出さないでいこうというのが最初のアプローチだったと。

西嶋 というのは、地域全体を見ても、染の関係の人たちは3割あるけど、3割しかない。見方をすれば「3割はすごいな」と思うことは思うんですが、「全体の3割やないか」と言う人もいはるわけで。「3割が全体である」と我々が行動していったら、これは地域

から絶対に批判を受ける。「そやけど3割は、すごいな」と地域の人に思ってもらえるようになってこそ、3割を生かせるのやないかなと。それが立ち上げて1年もならずに「染のまち」と打ち出すことができたんは、一つのきっかけがあったこと。それと隣接している学区が、そのために協力していただけたこと。

昔、僕らの子どもの時分はお隣に寄せてもろうても、皆、家に上がりこんで話をしてましたわな。町内の会合も、皆、町会長さんの家でした。最近は全くないですよん。どこかよその場所を借りてやる。お伺いに行ったって玄関でしゃべっているだけです。「公開工房」をすることによって「あそこの家の2階まで上がらせてもろうたわ。2階、すごいわ。奥の座敷、立派やな」とかね。そういうことがね、地域の人にしたら、新鮮に受け止めてもらえた。

大矢野 それは地域の人たちにとっても新鮮だったと？

西嶋 1回目は、よそからあまり来てはりません。ほとんど地域の人が「寄せてもろうてええんやろか」と言うて、集まってきてくれはった。第一回、第二回はそうですね。

大矢野 なるほど。

土山 自分のまちは「こういう地域なんだ」と再発見していったみたいなプロセスになった。そのきっかけが最初の染のまちの公開工房だったということですね。

皆さんからぜひ、何でも結構ですので、ご意見とか。ご質問を。

質問 西嶋さん自身、伝統工芸士として、今後のまちづくりと合わせて、人材育成や伝統工芸の技術を継承していくことについて。もう一つは平成13（2001）年からまちづくりを形成されてくる中で委員長として、まち

づくり計画の中でやってこられたことで、この地域ではマンションで壁面後退もされていない状況も見られる。その中で「のれんの似合うような建物」という、1、2階は町家風で、犬矢来（いぬやらい）があったりとか、その上は好きなように建ててもいいよというビジョン的なものが、今、本能学区の中であるのかどうか。そして、どういう手法を使って、それを今後、計画されていくのか。この2点を。

後継者の問題について

西嶋 まず後継者の問題ですけど、これは地域も業界も同じ悩みは抱えているわけです。それは伝統産業だけではないと思います。逆に伝統産業と言われるということは、将来、ほっといたらなくなるから伝統産業に認定しているだけであって。ただ、ゼロにはならないに違いないです。我々が家業を継いだ一番の要因は何かというと、「一番楽しんで儲けられる」というさかいに「勉強しなくてもええわ」ということで家業を継いだわけですね。昭和41（1966）年、高度成長期真っ只中で、まだ町内に車が2、3台しかない時代に、「お前、家の仕事を継ぐのやったら、車、買うたで」と言うもんやからね。ほとんど、そうでしたからね。「もしも家の仕事を継がへんのやったら、大学に行かなあかんで」「今から大学で、勉強もしんならん、そんなら、家の仕事するわ」ということでやってきて、家の仕事には魅力があったんですわね。あったというのは何か。経済的な問題ですわ。

京都市の商工部長が「このテーマで一回議論しましょうか」と話をやった時、「そんなん、簡単なことや。跡継ぎをつくらうと思ったら、金与えたらええねん。金を与えられる

ような環境をつくったらええ」。でも、一番難しいことです。「それが難しいですやんか」と。将来的には、もっともっと減っていくのは間違いない。うちの地域で190軒のうち、後継者、30歳までの人が家業を継ぐまでいってへん。お仕事をされているのは一桁ですわ、ほんまに。そやけど昔を見ても、じゃ、僕らが仕事をやり、昭和50（1975）年くらいの時、サラリーマンやった息子さんがサラリーマンを辞めて40歳になってから家業を始めはったということがあるわけですね。絶対、絶えてしまうわけではないし、その努力は「親の背中を見て、子どもが魅力を感じたらついてくるから、魅力を感じてもらえるように、これからどうしたらいいか考えていかんなんな。しかし、それは地域だけでは難しい問題や」と。それは業界の方になるかなと思ってます。

うちの業界では伝統工芸士、一級技能士、これも2年に一回、検定をやっています。僕もその中央検定委員で問題をつくったりしています。2年に1回で、1級、2級、両方で30～40名の受検者はあります。家族の後継者ではなく、業界に若い人も来ていることも事実です。どんなことでも、あまり先を考えなくても、何とか成り行きに任せたら何とかなるわなという思いの方が強いです。うちの子どもでも、別にやろうと思ったらずりよたらええな、と思うてるし、昔は10年修行しないと、どんな仕事でもあかんと言うてましたけど、今は昔と違って頭の回転もええ人が多いから、5年、一生懸命やったら我々のどんな業種でも、ほぼ一人前になりますわ。昔は勿体ぶって言うてただけで。

大矢野 ある程度、機械化とか？

西嶋 それもありますが、機械化できないものも、たくさんあるんです。

土山 「見て学べ」ということを積極的にすれば覚えられる。基礎的な部分は頭の回転で十分ですよというお話ですね。

西嶋 室町やったら、明るく日からネクタイ締めて「反物を持って売ってこい」。何もわからんものが売りにいってるのやから、売れんようになるのはあたりまえですわ。我々の職人さんの世界やったら1週間、大將が仕事してはるのを見てたら、だいたいね、真剣に覚えようと思うたら「次、ここからやってみい」と言うのと、ほぼ、できますね。1日失敗して、第一段階はできるようになりますわ。1年たったら、そこそこ、できるようになります。

土山 公開工房で京縫などを見ていると、自分には何年やってもむりだと思えますが。

西嶋 毎日1週間やったら同じとこに、針は上がってきよる。

大矢野 60の手習いというのはどうですか？ 今の話を聞いていて、なんかいけそうな感じがする。

西嶋 十分にいけると思えます。

土山 新しい機械や新しい技術的な部分があって、新しい機械とか科学的なものに馴染むのが若い人はできるということがあると思いますが。

西嶋 たとえばね、我々の業界で困ってのはインクジェットで染めるというのがあるんです。それが成人式の中振り袖では主流になっている。

土山 印刷と同じ感覚で？

西嶋 10年前にはドライクリーニングに出したらバーッと（色が）飛んでしまうとかの状態やったけど、今は、改良されていいのができています。だけど、それを京友禅やと言うてしまうと、だめちゃうかと。それを、

ある室町の商社は京友禅として売っておられるところがあるけど、そこらを、これから我々が職人として生き残っていく上では、ちゃんとやっていかんならん。当然、中国の生産も一緒ですけど、地場産業、基幹産業でいけるようにしていかないといかんなど。そこまでの機械化ではない、よりいいものができるための「機械」。小さな機械ですね。そういうものは当然、利用していかないとあかんし。友禅屋さんとか我々でも刷毛とか筆を使うんですが、職人さんがいなくなる前に、道具をつくっておられる方が、まずなくなっていくわけですね。その方が深刻ですわ。それに代わるものを開発しんことにはあかんようになってくる。それだけのよさというか、柔らかさとか、狸の毛とか、猫の毛の刷毛との違いは、どうしても出てきますから、それだけに、今後、職人さんも残っていくためには、我々も頑張らないといかん。行政も十分、そこは考えの中に入っていますし、これから対応策を考えることはしていると思うんですが。

どこから町並みが崩れたのか

もう一つ、町並みね。個人的にはあまり興味ないんです。というのはね、なぜ町並みがあんなったのか考えると、車社会になって車をガレージに入れるためには、そうするしかないんです。ガレージがなかったんですわ。お金（駐車場代）が高い以前に。僕ら初めて車を買う時に車庫がいる。車庫証明を、四条堀川に住んでますけど、壬生車庫に置いています。空き地もなかったんやね。車が増えていったら自分の家に車を置こうと思うのは当然ですよん。1階の塀は残して2階の表の部分だけを改築して車を置けるようにして

いったから、町並みは崩れていったんやね、町並みが崩れていった理由の一つは、この駐車場の問題があった。

もう一つは水洗便所になったことですやんか。あれによって土間でなくてもいいようになった。自然にそうになっていったんやから、それを元に戻すというね、なかなか難しい。そやけど、それをするためには、我々にできることは何か。のれんによって京都らしさ、本能学区らしさを、少しでも感じてもらえる。それを感じてもらったら、「あ、今度そうしようか。歳いったら車はいらん。1階部分をそれらしい引き戸に換えて元に戻そうか」と思ってもらえたらいいなと。よその地域よりも、より推進していけるためには、あまり露骨に言わんと、そういう形で広がっていったら、たとえば「のれんの似合う家」に直してもらえるようになったらいいなと。

若い人にバトンを渡していく

質問 担い手の件で、伝統産業の議論になっていましたが、まちづくりの担い手についてはいかがでしょうか。親の背中を見て育つということが好影響を与えることはあると思いますが、西嶋さんが持続的に活動されていて、担い手に次世代の方が出てきたと。そういう人がまちづくりにかかわることによって、学生が地域に入ることによって、息子さん、娘さんで、僕ら、私らがやりたいという人が出てくるとは思います、そういうことを感じることはありますか？

西嶋 それは大いに期待しているところです。地域まちづくりを考えた時、60歳はいいとこやなと。京都のどこの地域でも、行政はどこに入ってくるか。まず、連合会長の

ところに行くわね。でも、連合会長自体が高齢化しているわね。そこに行って「若い人材を」と言うたって、たぶん、出てこない。それで、我々としたら「本能学区は若いのがいるな」と、まず思ってもろうたらええと思います。旬の時に地域のリーダーになってもらうのがまちづくり委員会やと。過去にこだわっていくのではなく、未来に向かって、地域の人材を、魅力ある活動の中で、垣根をなくして、より地域に入ってきてもらえるようにすることが、我々の最高の役割なんやから。

僕がかつて受け持った時の世代の方に、リーダーシップを発揮してもらおう。我々は10年前に、先輩にフォローしてもらったことを、今後もしていく。それも、何も委員長がいて、顧問とか相談役の肩書をもたらうのではなく、僕が委員長をしていた時も、リタイアされて80歳近くの方が委員でおられるわけで、僕と同じように委員になって副委員長も委員になってやる。「なんでもう一人の同世代の副委員長を、今度、委員長に指名しなかったんや？」という意見もあったんやけどね、「そんなんしたら、何も変わらない。若い人にやってもらわないと地域は変わらない」。はっきり、それは言うてます。その若い人材が、もう一人の副委員長やけど、「若手ぞくばらんの会」を1年前から開いてくれていて、委員会には来てないけど、彼には寄ってくる人間がいるわけね。そういう人間が、彼がトップになったら、今まで以上の協力をしてくれるのは間違いない話や。それがまた下につながっていくはずやから。今は邪魔しないように委員長を支えていく役割をしていったらいいなと思っている。

「今までやってきことと同じことを続けていってくれ」とはさらさら思っていないから、「新しい人材で考えて、続けていきたいと思

うことはやったらええし、新しくやろうと思うことはやったらいい」。特に「公開工房」は10年前からやっているから、10年前の職人さんが10年歳とっている。またその後の10年で、（最初からみると）20年歳をとらえるわけやから、自然になくなっていくのはあたりまえや。自然になくなる前に「次の若い人たちでやらはったらええし、そこは何ら遠慮せんと考えてくれ」と言っています。

大矢野 京都のまちは昔から都市社会なんだな。ここは引き際と思ったら、長老をつくらない、ある種の院政をつくらないで次の世代にスパッと託していく。そうすることによって新たな町のエネルギーが出てくるわけですから。そこは京都の町が持っている都市の感覚というのがあるんだろうなと、今の話を聞いていて思いました。

土山 10年たって世代交代の時期、西嶋さんが若手を抜擢されて、任せて、ということですね？

西嶋 ニュースも一緒ですけどね。編集長、トップでやってくれた女性の方ですが、おばあちゃんの介護が必要になってきたし、子どもさんに赤ちゃんが生まれたので、これからはばらくはできないと。それなら、今までかかわっていない人に広報部会に入ってきてもらえるようにして、新しい体制をつくらうと。

大矢野 そのへんは、奈良はどうなんだろうか？

質問 奈良も伝統産業は一部の職人さんというより、芸術家の方が、何とかやっていくということで、結構大変なんですけど。京都と同じく伝統産業としてのプライドは、皆、持っていますから何とか続いていっているものの、これでお金儲けできる状態ではないので大きな課題だと思います。後継者の養

成が大変ですね。

まちづくり委員会でイベントをする時、学生さんたちが毎年参加される。学生さんのリクルートは、どのようなルートでやっておられますか？

西嶋 先生のつきあいからですわ。府立大学については、もともとまちづくり委員会を考えてくれという時、その先生が中京の座長をされていて、一緒に委員会を立ち上げる要請に來られて「うちの学生を寄こすから」と。立命の先生については、立ち上げたときは、よその地域にも入っておられて、その地域と交流を持つために景観まちづくりセンターがコーディネートして、うちで交流会をやったのがきっかけです。その先生とは土山先生と一緒に京都市の審議会で一緒にやったりしていて、「何とか本能学区に学生を」というのが前からあったんです。でも、府立の先生のこともあるから、ちょっと難しいなと思ってはいたんですが、「都市再生モデル」調査の時、「これがいいきっかけやな」と思って、人手もほしかったので「ここで学生さんに入ってくれたらスムーズにいきますわな」とお話をし入ってきてもらいました。

土山 西嶋さんのお話を伺っていると巻き込みがお上手で。いろんな人が巻き込まれる。それには巻き込みを受け取る側の柔軟性も必要で。

西嶋 そうです。正直言うて、自然にすぐそう思うんですね。NHKのアナウンサーの話をしましたが、あの後、秋に敬老会があった。敬老会で司会していて「これは鹿沼さんに来てもらって司会してもらったら一番ええで」と。連絡とったら「1時間くらいやったら行けます」と言っていただけ。1時間来て、式典の時だけやってもろうた。NHK京都で6時10分くらいからの番組の

アナウンサーやから、お年寄りも「なんでこの人が、うちの敬老会で司会をしてくれるのや」と喜んでもらえたり。そういうきっかけを、うまいこと利用させてもらおうというのは、すぐそれを思いつくというのがあるのかもわからんけどね。

土山 何かのきっかけを使って「この時にはこの人とこの人」と新しい人を入れていく。そこからつないでいくことがお上手だなと。受け止める方、まちづくり委員会にその垣根の低さ、開放性がないと参加できない。ただ成功している事例だからこそのこだわりとか、プライドができていくと、そこに深くかかわっていることが偉いことだとか、深くかかわる人と、浅くしかかわれない人との間に、少し波が出てくるのではないか。それをまた西嶋さんはうまく避けておられる。

西嶋 委員さんには、それは一切ないです。ありがたいなと思うのは、マンションにお住まいの方で、大阪の大きな会社の重役までしてリタイアされはった人が、地域に住んではって「おいでやす染のまち本能」をした時に「お手伝いさせてもらいます」と来てくれはった。「私は何もできへんさかいに」と言わはるので、「いや、とりあえず一回、どんななか見てくれはったらよろしいですわ」といつてたんですが、しばらく経って、何をしてはるのやろと思うて見たら実演コーナーの下足番をやってくれてはるんですわ。靴脱いで体育館に入る人に。もともと会社に入ってはった時は近くにも寄れんような人が「私はこれやったら、できるさかいに」と。それから毎回、手伝いに来てくれはる。そらね、他のものも、それにいい印象を受けているし、他の人も文句を言わんと、どんなことでもしてくれはりますわ。

土山 数的なことで参考までに。30名の

委員会の中で20名が、ほぼいつも来られる。世代交代をしていかれる。いつも来られるメンバーにマンションの方も多いですか？

西嶋 マンションの人は4人くらいですね。

土山 イベントの時にはマンションの方も手伝われる？

西嶋 子どもさんとのつきあいの中で、地域に卓球クラブとかバレーボールクラブとかグループがあって、3人が来てくれて、その中の一人がマンションの方ということはあります。

土山 新しい方に来てもらいたい時、小学校でピラを撒く時に「お手伝い募集」みたいなこともあるんですか？

西嶋 それはしてません。あまりようけ来てもろうても、経費がいるし、今のところ十分やから。必要な時に頼めば、間違いなく10人、協力いただけるような体制はついていると思います。

委員会と自治連合会のあつれきは？

質問 まちづくり委員会と自治連との関係で、まちづくり委員会は自治連の中に入っているのか、棲み分けをしているのか、敵対しているのか。自治連は高齢化が進んでいて先行きが見えないところがありますね。将来的にまちづくり委員会が代わっていくようなことがありうるのか、その位置関係について。

西嶋 最初、自治連合会が、まちづくり委員会のコアのメンバーを集めた。その中に私がいたということです。まちづくり委員会の位置づけは自治連合会の中の各種団体の常設の委員会です。町内会と各種団体が集まって連合会ができていて、その全体が認知をし

た直属の委員会です。予算的には当初、30万だったのが40万もらえるようになって、現在は年間45万円を自治連合会からいただいています。それがこの間、規約改正の会議でいろいろありまして、今後も同じ位置づけでいくかという議論になりまして、各種団体と同じレベルの委員会の名前で各団にしよう、来年4月には各種団体と一緒に横並びになります。

土山 「いろいろあって」というところ、お話いただくのは難しいでしょうか？

西嶋 新聞やテレビや行政の方から「本能学区まちづくり委員会」と言うていただけることは、我々としてはうれしいことですが、先からある既存の団体で、特に活発に活動されているところからすると、多少のやっかみがあったりとかもあります。我々はそうとは思っていないけども。まちづくり委員会の位置づけがどこやというのが、当初つくった時の人はわかっているんやけど、その後、体育振興会の会長や消防の団長やは代わっているわけで、そのプロセスをわかってもらえない方になると「なぜ委員会だけそうなんや？」となってきて。

イベント大賞でお金をもらったり、都市再生モデル事業で補助金をもらったり、その時は宝くじの収益金で京都市から「何かまちづくりに使えるものがあったら言うてもろうたらいい」というので盆踊りの櫓やら音響設備やらを委員会にいただいたんですね。そんなことを「そのお金がどこから出て、どうやっているんや」と。今の人は、経緯がわからん人があるわけですね。「監督管理しんとあかん」と規約を新しくつくってきはった。「ちょっと待ってくれ、これはどういう意味や。まちづくり委員会が監督管理をされんならん」というような委員会（運営をしてると言わ

はるん）やったら、（まず、対応策を）委員会は委員会として考える。監督管理をするなら、ここに集まっている15人ほどですけど、まちづくり委員会の定例会に必ず出席してもらわないと困ります。監督管理しようと思ったら、まちづくり委員会のことを知らんことには監督もできまへんで。そんでよろしいですか？」と言うと「いや、その文章は外します」と。「その文章を外すんやったら、何も各団と違うとしんでも一緒にしたらよろしいやん」、その方がすっきりするんやから。そんで委員会としてもええですから。僕も来年代わるから、別に何を思われようがかまへんし、次の委員長がやりやすいようにしていくことが大切やと思っていますから、遠慮して言わへんより、これからは言うていかんとあかんと思ってるんです。

質問 自治連の手の平からどんどんはみ出していくようなパフォーマンスがあるから、その中に収めたいと。それでも各種団体になったら自由な活動は？

西嶋 いやいや、そんな、地域のためにやっていることですから自由にやれます。批判があつたら、批判を言うてもらって、そこでお互いに議論して、改めんならんことは改めたらいいと思うし、誤解やと「それはあんたの考えは、間違ってる」ということがあれば、撤回してもらったらいのやし。

質問 まちづくりは、やはり若返りというのが、重要な課題だということですね。

西嶋 そうですね。それは絶対必要です。うちの学区で70歳以上は、ほぼ600人近くなっています。4800人ほどの人口で、そこまで増えています。そやけど、若い人も増えているわけで、それ以上に増えていますから若い人にも目を向けないといけないうし、高齢者は制度の中で優遇されている問題もたく

さんあるわけで、若い人の動員は考えないといかんなど。体振や消防に、今から入れ言うたって、下積みを今からするととなると、なかなか難しい。それやったら受け皿を、まちづくり委員会だけでなく、つくっていかないとあかんなど。防犯委員会とかも委員会が提案して3年ほど前に立ち上げました。PTAの役員が小中で地域からお世話いただいている。ところが地域にはその顔が全く見えていない。そういう方々が次の時代を担っていただく方々やから、そういう方々が集まって地域で協力できるような要望を出していただく窓口としてつくってってもらいたいなというのがあります。

地域では「教育後援会」という組織があるんです。教育後援会を若返らせて、今、提案して「新しい組織づくりをしよう」と。若い人材がまずそこに入ってくれないと。皆、協力してくれはる人材なんやから、そこのところを、見えるようにしていきたいなど。

まとめとして

土山 ありがとうございます。まとめとして、お話の中で出てきたことと、出てこなかったことを、つないでお話をさせていただくと、まちづくり委員会そのものがうまくいく、うまくいくところに、また難しさもあるということがありました。うまくいくこと、とくに、年2回の歩いて楽しいまちづくりのイベントが大きな成功をおさめている。賞をもらったり、支援をもらって評価を得ていることと同時に、それは地域の方のためのイベントなのか、観光のためのイベントなのか、産業振興のためのイベントなのかというブランシングが、これからの難しい要素として出てきているのではないかなと。

この間、2002年から西嶋さんとお話をさせていただく中で、西嶋さんは常に地域とそこに住む人に軸足を置いておられる。その軸を外されない方なんだなという印象がありました。そこに軸足を置いているから、いろんな人が、いい循環として回っている。地域づくりは、うまくいくことと、うまくいくからこその難しさと、そしてどこに軸足を置くのかというところにヒントがあるように思いました。

地域とそこに住む方に軸足を置かれるという意味では、他の団体との関係、行政との関係、京都市、京都府との関係でも置かれているようなところがあります。京都市でされることに、それなりにおつきあいされている面もある。特別養護老人ホームをつくる時は、上から計画が来たけれど、まあまあと。高さ制限とか、ここに住んでいる人は「この高さまででないといけない」ということについては「それはちょっと待ってくれ」という話になるところも、軸足は基本的に、その地域に住んでいる方に置かれているのだなと思いました。新しく来られた地域の方と、昔から住まれている地域の方とのよい関係性をつくっていくことで軸足が太くなるか、逆に二股に割かれるようなこともありえるのかなと思いながら、いずれにしても軸足はそこに住まわれている人にあるんだなということを思いながら伺っていました。

西嶋 そうですね。その中で行政も、本能学区が染のまちであることを利用していたいていることが多いんです。特別養護老人ホーム、これは建設中にエレベータの前に各階を色で分けたい。そのためにはエレベータを降りたら右に行ったらどこ、左に行ったらどこというのを、麻のタペストリーで染め抜いたもので置きたいと。それを我々の

委員会でつくって提供したりとか。この間の特養の家族会の方が3周年の記念に各入居者に「染のまちらしいものを」ということでランチョンマットを、各10色、ユニットごとに、のれんを寄付した時ののれんの色と同じランチョンマットをつくってもらえないかということで、つくらせてもらったりとか。

来年、中京区が区制80周年で、この間も会長が来られて「役所にのれんを飾って80周年を祝いたいから、つくってもらえないか」と。そういうことを委員会を通じて話をさせてもらうということは、ありがたいことやなと思っています。着物についても、着物のことを全く知らん下京区長が「夏祭りに回るのに浴衣をつくってもらえへんか」と言わはるので、「区長やったら浴衣やったらあきません。麻の着物をつくらはったらええさかい」とつくらせてもらったり。いろんなことが「染」というキーワードで依頼があるのは、うれしいことやなと思います。それが本能学区を知ってくれてはるということやなと思っています。それがまた、次の人にもつなが

っていくだろうと。

土山 ここは譲るけど、ここは譲らないとか、そのあたりの芯があって、しかもオープンだなということを感じながら拝見してきました。

西嶋 染ばかりに絞り込んでイベントをやっているのではないということが、今まで続いてきたというのは、のれんスタンプラリーをやらせてもらうことになったことがすごく大きいですわ。これをしていなかったら「何や」となってきたかもわかりません。これからも、すごく新しい企画を考えてもらって、これが主流になっていったらいいと思っています

土山 長い時間をとっていただき、いろんな話を詳しく伺いました。まちづくりのポイント、人づくりのポイント、イベントの成功プロセス、いろんなヒントをいただきました。本当に今日は長時間、ありがとうございました。それではこれで終了とさせていただきます。

[2008年11月13日]

